

真剣に向き合い「選ぶ」経験が 進路選択力を高める

京都大総合博物館准教授 塩瀬隆之

生徒が主体的に進路を選択していく力を育むために必要な指導とは何か。コミュニケーションデザインの専門家である塩瀬隆之准教授は、日々の教育活動を通じた選択の訓練と、進路選択後の進路指導の重要性を指摘する。生徒の進路選択力を高める指導の工夫を聞いた。

選択する訓練の不足が 迷いや後悔を生む

中学校卒業時の進路選択を、大学受験や就職活動と同じくらい大切だと考えている方は、それほど多くはないでしょうか。私は中学校で講演をする時、「高校受験は大学受験や就職活動と同じくらい人生の重要な選択です」とお話しさせていただいています。もし、生徒が高校選択を真剣に考えていないとしたら、保護者や教師がその重要性を正しく伝えきれていないかもしれません。もちろん、中学校卒業時の進路選択で人生の全てが決まるわけではありません。ここで

のに、選択する訓練をしていないために、不安は限りなく広がっていくのです。

大学受験や就職活動では、選択せずに残した選択肢の数も多くなるため、選択した現状に不満が多いと、「この選択で良かったのか」「もっと良い道があったのではないか」という後悔や疑問にとらわれてしまうのです。

大切なのは選択肢の数ではなく 選択の過程

高校入試の限られた選択肢の中で、生徒はどこまで切実に進路と向き合えるのでしょうか。私は、少ない選択肢でも、進路について真剣に考えることは可能だと思います。

最終的に進学を決めた高校が自宅に近い学校だったとしても、「将来、進みたい道があり、そのために必要な勉強が出来るから」というように、その決定に至った明確で積極的な理由があれば、たとえ選択肢は少なくても、入学後、自分がそこにいる意味を肯定的に考えられるのです。逆に、消極的な理由だけで選んでしまうと、「保護者や教師に言われたから」などと選択の失敗を他人のせいにし、不満ばかりが大きくなっていくでしょう。高校生活を送る中で、本当にこの選択でよかったのかという疑問が湧いた時、困難に負けずに踏みとどまれるかどうかは、選んだ過程にかかってくるのです。

どのような選択をしても、理想と現実の差

重要なのは、選択の結果ではなく、選択する行為そのものです。

中学校から高校へ進学する時の選択肢は、それほど多くありません。ところが、高校に入り、大学進学や就職となると選択肢は急に広がります。社会に出る時には、「世界は広い」ことを感じつつも、選択肢の全てを見ることも出来ずに、限られた世界の中で人生を左右する重要な選択を行うこととなります。

「複数ある選択肢から適切なものを選ぶ」という行為は、ある程度の時間を掛けて訓練することが必要であるにもかかわらず、日本の教育ではその機会がほとんどありません。ただでさえ人生の選択には不安がつきまとう

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる



しおせ・たかゆき◎京都大大学院工学研究科博士前期課程修了。博士（工学）。京都大大学院情報学研究科助教などを経て、現職。

は必ず出てきます。選択肢の数ではなく、自分の問題としてどれだけ真剣に向き合い、その中で悩みながら自分で選択したという過程や経験が大切なのです。

無限にある選択肢から自分なりの答えを見付ける

生徒の選択力を鍛えるために、日常の教育活動の中で出来ることはたくさんあります。例えば、教科書などにある選択問題を見ると、選択肢の中に正解があることがほとんどです。一方、アメリカの小・中学校の教科書の問題には、「この情報だけでは1つに定まらない」という選択肢のある問題があります。

これには他の選択肢にはない無限の解答が含まれており、選択肢の中に必ず正解があるとは限らないということを、教科の問題を通して知ることが出来るのです。

教材の工夫によって選択力を鍛えることも出来ます。私は、小学校・中学校・高校の先生方と共同で「宇宙箱舟」というゲーム形式の教材を作りました。もし宇宙に引越すとしたら、どの動物を宇宙船に乗せるのかを考えてもらうもので、途中で病気が発生して鳥が死んだり、虫だけになってしまったり、さまざまな困難が待ち構えています。生物多様性や食物連鎖、倫理、宗教、国際理解など、いろいろなテーマに絡めて活用できる教材です。

子どもたちは、始めは「パンダを連れて行きたい」など、自分の好きな動物を舟に乗せたいと思いますが、徐々に自分が生き延びることを考え、牛や豚、鶏といった動物を選ぶようになっていきます。更に、「牛や豚を連れていくなら、餌も必要だね」「なぜゴキブリはいけないのだろう」といった議論を繰り返す中で、正解はないけれども悩みながら進んでいかなければいけないことを経験します。多くの選択肢からそれぞれのつながりを考え、自分なりの解答を見つける経験が、人生の重要な選択の際にも生かされることを期待しています。

大学と社会のつながりを伝え生徒の視野を広げる

毎日の授業や生徒との会話の中で、先生方が生徒の視野をどれだけ広げられるかということも、重要なポイントになります。そのためには、何よりも、先生自身が社会と学校、学問とのつながりに関心を持ち続けていただくことが大切です。

例えば、「将来、環境問題に取り組みたい」という生徒に対して、「大学に『環境○○学部』や『環境○○学科』というのがあるらしいよ」という情報提供をしようとして、むしろ選択肢は狭まってしまいます。環境問題であれば、エネルギーや材料などの理系分野から入ることも出来ますし、循環経済や哲学など文系分野からアプローチすることも可能です。文理

を問わずさまざまなルートがあり、自らの希望を実現させる手段はたくさんあると伝えることが、生徒の意欲を引き上げるポイントになると思います。

大学の出身学部が、社会に出てからのキャリアにそれほど関係のないことは、大抵の人が知っています。しかし、多くの子どもが、「二度、理系を選んだら文系には行けない」「大学に入れば、自分が進んだ学部以外の分野には二度とかかわることが出来ない」という強迫観念のようなものを持っています。実際には、工学部から大学院で薬学研究科に進学する人や、法学部の学びで特許に注目し、工学関係に進む人もいます。こうした柔軟な路線変更が出来るという事実は、進路指導の場で生徒にあまり伝えられていないようで、大学生になってから「なんだ」と安心する学生も少なくありません。

人は、理系や文系の看板を一生背負って生きていくわけではありません。世の中の多くの問題は、理系の知識だけでも、文系の知識だけでも解決できません。中学校時代からそうした大学と社会のつながりを伝えて、生徒の視野を広げていくことも大切です。

「進路選択後の進路指導」で前に進む耐性を鍛える

子どもが自分の将来に主体的に向かっているためには、自分の選択に真正面から向き合

う勇氣も必要です。そのために、私は「進路選択後の進路指導」をぜひ教育現場でも導入していただけないかと考えています。

生徒の進路選択には十分な時間を取りたいと考えても、どうしても限界があるでしょう。それはやむを得ないと思いますが、真剣に考えれば考えるほど、決定までに時間が掛かるものですし、いったん決まったとしても、本当にそれで良かったのかと、悩み続ける生徒も少なくないはず。本来、進路選択とはそういうもので、モヤモヤしたものをなくすることは簡単ではありません。大切なのは、モヤモヤを解消することではなく、モヤモヤを抱えながら前に進んでいける耐性を鍛えることです。

モヤモヤと向き合う力を養うためには、なぜそれを選んだのかを考えたり、説明したりする訓練が有効です。生徒が自分の選択について語り、先生は聞き役に徹する。あるいは先輩に語る機会をつくってもいいかもしれません。生徒全員が大変であれば、代表の生徒が語るのも良いでしょう。モヤモヤと向き合う環境をいかにつくるかという点は、生徒の選択力を高めたり、生徒が自身の選択を受け入れていく上で欠かせない要素です。

生徒の「気付き」を待つことが主体性を引き出す鍵となる

多くの学校では、進路決定に期限を設けて

いると思います。たくさん時間を取れることが理想的ではありますが、願書提出など何らかの締め切りが存在することも現実だからです。

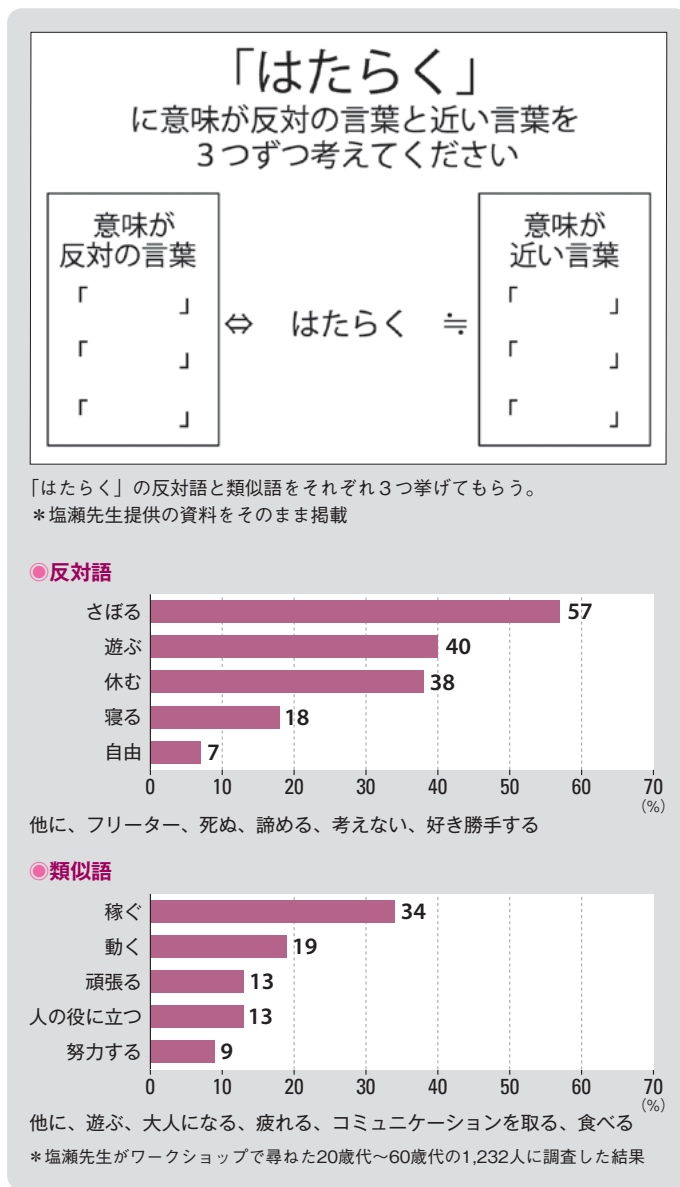
しかし、期限が迫ってきて、周囲からの発言が増えれば増えるほど、生徒にとっては「進路を決めたのは私以外の誰かである」という思いを強くしてしまい、学習への意欲を失い、進路先でも積極的になれなくなってしまいかもしれません。もちろん、生徒の主体性に任せることは大切ですが、頑として手を差し伸べないことに徹してしまうと、生徒はかえって不安になるだけです。生徒が進路を選択する上で判断材料となる客観性の高い情報を、教師が提供することは必要です。ただ、そうした情報を過度に信頼し、その評価通りに指導するだけでは、その決定を生徒自身のものに出来ません。

生徒は簡単に進路を決められないということとを、まず先生方が自覚し、その上で、生徒が与えられた情報や提案を受け止め、自分なりに解釈し結論を出すまで、先生がじっくりと待つことが大切ではないでしょうか。生徒が自分の言葉で説明できるようにまでじっくり考えさせ、生徒自身が気付くのを待つのが理想です。

もちろん、進路を決められない生徒には、どのような観点を大切にしたいのかを一緒に考える時間を持つなどの支援も必要でしよ

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

図 「はたらく」の反対語と類似語を尋ねた調査結果



大人も理想と現実のギャップの中で生きている

子どもが主体的に進路を選択するために、職業観・勤労観を身に付けることが必要

う。ただ、その際にも重要なのは、生徒自身の気付きを、大人があまりコントロールし過ぎないことです。自立性や自由なアイデアは、時間を掛けて待つてさえないれば、必ず生徒の中に現れます。待ちたいと思っても待ちきれない、しかし、それでも教師や保護者がほんの少しでも長く信じること——それが生徒の主体性を引き出す鍵ではないでしょうか。

だといわれます。確かにその通りなのですが、職業体験や職業調べだけから職業観を教えきれぬのかどうかは疑問です。

そもそも、大人はどのような職業観や勤労観を持っているのでしょうか。最近、私は講演やワークショップで出会った学校の先生方に「『はたらく』の反対語はなんですか」と尋ねるようにしています。ここでの「はたらく」には、対価をもらっているかどうか、どこかの企業に所属しているかどうかは問いません。「はたらく」について、意味が反対だと思ふ言葉と意味が近いと思ふ言葉を、3つずつ書いてもらっています(図)。この質問

をすると、「はたらく」ことに対して、その人がどのようなイメージを持っているかがよくわかります。

反対語に「死ぬ」という言葉を挙げる人は、極端な表現ではありますが、「はたらく」ことを肯定的に捉えている人なのでしょう。反対語に「さぼる」、類似語に「社会貢献」を挙げる人は、仕事に対して時に生きがいを感じ、時にしんどさを感じているのかもしれない。大人も、理想と現実のギャップに悩みつつ、モヤモヤしたものを抱えながら仕事と向き合っているわけです。

大人も悩みながら働いているとしたら、悩みそのものを子どもと共有するといふことだと思います。知識として教えることが出来ない以上、大人もそこを正直に認めて、生徒と一緒に悩み、考える機会を設けられると良いのではないのでしょうか。

あるいは、教師が自分の体験を生徒に向けて語るのも良いかもしれません。保護者や兄弟姉妹、学校の先輩の話や機会を設けるのも良いでしょう。選択の時にどのように悩んだのか、満足していること、後悔していることはないか。失敗も成功も含めて、大人や先輩が経験を語ることで、進路選択の大切さを子どもは気付くのではないのでしょうか。